産経新聞　<第三種郵便物認可>

医療

切らないがん治療「サイバーナイフ」

患者の負担少なく根治も

がん治療で外科手術と並んで行われている放射線治療。病巣に正確に集中照射することで、がん細胞にダメージを与える「サイバーナイフ治療」は副作用や患者の負担が少なく、根治も可能な治療法として注目されている。

（戸谷真美）

大阪市で飲食店を営む西尾登さん(65)は2年前、喉に違和感を覚え、受診した病院で下咽頭がんと診断された。ステージⅣで一部は転移も確認。当時、医師からは「声帯も全て摘出せざるを得ない」と宣告されたという。「取ったらがんは治るかもしれん。でも、その後の生活はおもろない。覚悟はしたが、『もっとええ方法ないんかな』と思った」

新百合ケ丘総合病院（川崎市麻生区）で西尾さんの治療を担当する放射線治療科の医師、宮崎紳一郎さんは「声を失うなんて大変なこと。サイバーナイフはあくまで治療法の一つだが、患者さんの負担が少ないことは大きなメリットだ」と話す。

多方向から集中照射

サイバーナイフは、病巣に向けてエックス線を多方向から集中照射し、がん細胞にダメージを与える定位放射線治療装置だ。米スタンフォード大のジョン・アドラー教授によって開発され、約10年前から国内の医療機関にも導入されつつある。従来の放射線治療に比べ、周辺の健康な細胞の被曝を抑えられるため、副作用が少ない。

また、多方向からの照射が可能になり、単発のがんなら短期間の治療で根治できる可能性もある。頭部を金属のピンで固定する必要のあったガンマナイフより体の負担も少ない。

同院では最大1200方向から集中的に照射する機器が使われており、脳腫瘍など頭頸部のほか、肺や肝臓、骨盤内の腫瘍など体幹部のがんも治療できるという。

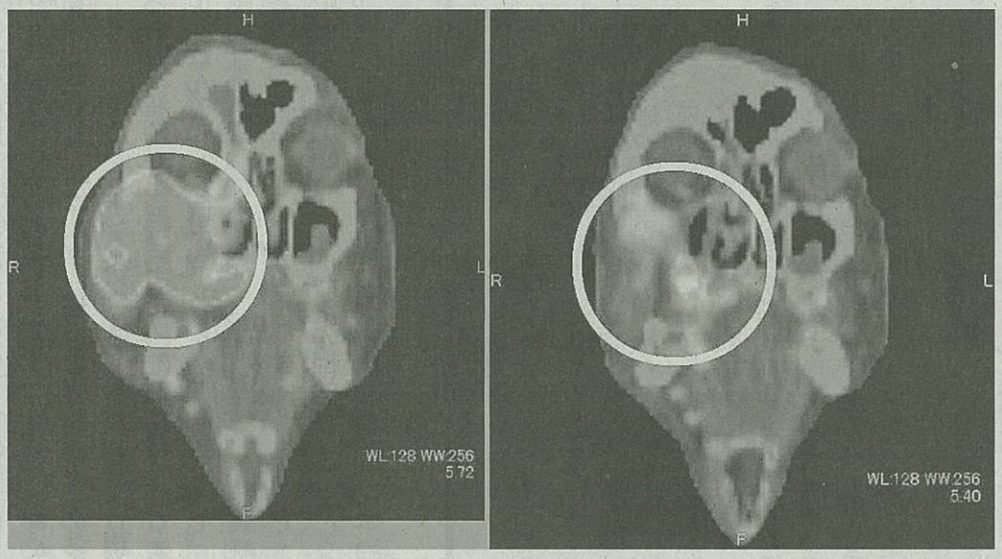
宮崎さんはPET（陽電子放出断層撮影）検査の画像などを基に、一人一人に応じた治療計画を立てている。「以前と違って痛みもなく、早い人なら3日で人生が変わる。適応できるがんはもっと広がる可能性がある」。社会生活への復帰も容易で、働きながら通院したり、高齢で体力に不安がある場合にも受けたりしやすい。治療は原則として健康保険が適用される。

向かないケースも

西尾さんは今年2月、12回にわたって受け、下咽頭がんはほぼ消滅。治療後は大阪で以前と同じように店頭に立った。「一時は抗がん剤で食べられんかったから、ものが飲み込めたときはうれしかった。お客さんには『しゃべれるやん！』と驚かれるわ」と笑った。

同院の笹沼仁一院長は「広範囲を照射するわけではないので、局所的ながんに向いており、多発的ながんでは他の治療がいい場合もある。胃や大腸など向かない臓器もある」と指摘する。既に限度いっぱいの放射線治療を受けている場合も選択できないケースがある。

笹沼院長は「適用にはPET検査などによる正確な診断が不可欠。万能ではないが、有効な選択肢の一つで、これから多くの医療機関で導入が進むのではないか」と話している。



上顎（じょうがく）がんの70代男性のＰＥＴ検査画像。左が治療前、右がサイバーナイフ８回照射後。○印内の病変が消えているのが分かる
（新百合ケ丘総合病院提供、一部画像処理しています）

PET（陽電子放出断層撮影）

ブドウ糖代謝などの機能から体内の異常を測る画像検査。形状変化を見るCT（コンピューター断層撮影装置）などの画像検査と異なり、全身を一度に調べることができる。また、腫瘍の場合は良性・悪性の区別、転移の有無、治療効果の確認など、より詳しい診断のために使われている。てんかんや悪性腫瘍・悪性リンパ腫の診断や再発の有無の確認など特定の目的のための検査は昨年から保険適用となった。人間ドックのオプションとして受けられる機関も増えている。